

## 運歩色葉集と印度本節用集

### ——所収語彙の注記をめぐって——

清水 登

#### (一) 節用集と運歩色葉集との書誌的關係

節用集と運歩色葉集との書誌的關係についてははやくから指摘されているところであり、それらの諸説について概観してみよう。

#### 〔I〕 節用集の門別が、下學集か又は聚分韻略に最近く、其の所収の語が、庭訓往來以下の往來の類や、下學集、運歩色葉集、其の他足利時代の辭書に類似し、(橋本進吉「節用集の著者年代及び名義」『古本節用集の研究』二八八ページ)

#### 〔II〕 所収語彙は下學集・節用集等他の通俗辭書と同じく全部漢字表記の語で、これに片假名の附訓を加へてある。注記を有する記もかなり多く、注記には特に寺社その他の固有名詞には創始濫觴の年代の逆算を掲げてゐるのが一特色と言へる。これは節用集印度本の諸本にも見られる特色であつて、本書(筆者注、運歩色葉集を指す)はそれに倣つたといふよりも、寧ろそれに基いたものと言つた方が適當であらうと思ふ。(中略)日本國六十餘州名數(國郡名及び田地町數)・日本國里數男女員數等を「カ」部の末に附載してあるのを見ると、印度本類の中でも弘治二年本類の原になつた様な傳本を採用してゐるのではなからうかと思はれる。注記に逆筆年數を多く添附してある等の性質もこれに合する。(川瀬一馬『古辭書の研究』八八九ページ)

#### 〔III〕 弘治二年本における、叙上仮名文字遣の引用と、同時代の古辭書中

に比肩すべきものありやと相看するに、既に数条において引用した如く、運歩色葉集が最も近い。(中略)仮名文字遣の多くの本に見えぬ「小定」を、節用・運歩の双方が有する点において浅からぬ關係が想定され、運歩が花木名に「知母<sup>サモ</sup>定」を、テ部に「知母<sup>セイ</sup>定<sup>サモ</sup>」の如く、同一用字を二部に分出するものを一ヶ所に纏め掲げたのが節用の「知母<sup>サモ</sup>」であるとするならば、從來考えられたように、節用→運歩の線よりは寧ろ、運歩→節用の線の方が妥当なるかに見える。(山田忠雄「節用集と色葉字類抄」『本邦辭書史論叢』七一五ページ)

右の諸説をまとめると、大略次のようになる。

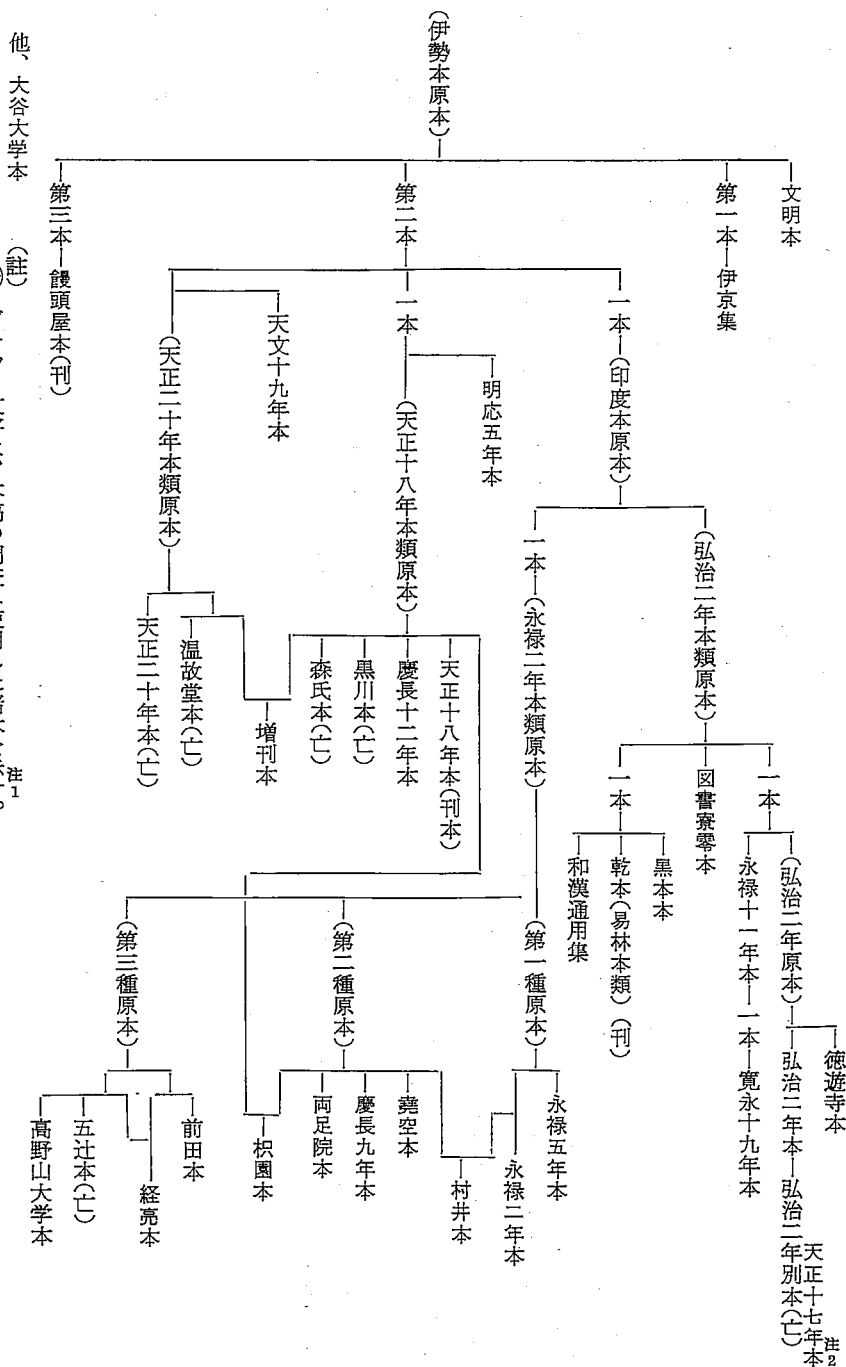
① 節用集と運歩色葉集とは書誌的な面で緊密な關係にあり、とくに弘治二年本類節用集の附録項目の配置や注記に逆算年數を配していることなど、両本には共通点が多い。したがって、運歩色葉集と弘治二年本類節用集とは書誌的交渉があつたであらうと推定される。

② 運歩色葉集と弘治二年本節用集とに引用される仮名文字遣の記載方法を對比してみると、運歩色葉集→弘治二年本類節用集のような書誌的図式を想定することができる。

そこで、本稿では①の「運歩色葉集と節用集との書誌的關係」について所収語彙の注記を中心に調査・考察してみようと思う。

げ、書誌の説明は略す。また、印度本内部は、門部の立て方などから、弘治二年本類、永禄二年本類、枳園本類とに分類されることになる。その三種の特徴を橋本進吉博士の指摘にしたがって整理してみると、大略次のようになる。

古本節用集の系譜（『印度本節用集』古本四種研究並びに総合索引）所収）



他、大谷大學本

(註)

ゴチック文字は、本稿の調査に使用した諸本を示す。<sup>注1</sup>

(二) 中田博士は、橋本進吉博士の説を基に川瀬一馬博士の調査を補って作製された。

弘治二年本類

部数は四十四部。「ゐ」「お」「ゑ」は、それぞれ「い」「を」「え」に併せる。門数は十五。諸本に共通のものが十四門。衣服・光彩の二門のあるのが特徴で、殊にミ部に光彩門をもつ。

永祿二年本類

部数は弘治二年本類と同じく四十四。門数は十三または十四。諸本に通ずるもの十三門。楽名のあるのを特徴とする。楽名門が諸本を通じて存するのは、ハ部である。

枳園本類

部数は四十四部で、「為」「於」「恵」部には本文を欠く。門数は十四。楽名はハ部、錢数はイ部に限られ、ヤ以下を下巻とし、四十四部十四門の体裁は永祿二年本類に似ているが、「錢数」門だけが多く、また「時節」を「時候」とする。所収の語において日本諸国名が附録でなく本文中に撰取されているのが特徴で、永祿二年本類と伊勢本の天正十八年本類とを合成したものと考えられている。

(三) 印度本節用集と運歩色葉集

橋本進吉博士は『古本節用集の研究』（諸本の系統的関係）で、印度本諸本を引用し、印度本原本に言及している。

浄蔵貴所 祈八坂塔二不傾（弘治二、天正十七、圖書寮、黒本）

祈八坂、塔二不傾山城州人也諫議大夫善清行八子也延喜時人也四  
歳ニシテ、説千字文ニ聞レ一知レ二、十二歳ニシテ、出家為三天梯、慈覚、

弟子ニ中齡草ニ創、雲居寺ニ矣落座之後行力尚不レ衰折ニ鴨河水而逆  
流祈八坂塔二不傾或祈隣家、桃実ニ与諸子ニ矣奇事甚多、不レ違ニ  
枚舉ニ焉『又云金峯山日藏上人兄浄蔵貴僧入滅者康保元甲子  
十一月二十一日也年七十四』

（堯空のみ）とある、永祿二、永祿五、枳園

浄蔵貴所 山城州人也（天正二十年本）

浄蔵貴所 山城州人也善清行第八子也延喜時人也祈八坂之塔一人也（伊京集）  
橋本博士は、以上の注記の異同を次のように分析している。

此に由つて観れば、永祿二年本類は、此の弘治二年本類にあるやうな註に「山城州人也」以下の長い文を附け加へたものである。併しながら、猶根源に溯つて考ふるに、弘治二年本類の諸本中、「祈八坂塔不傾」と註したのは、永祿十一年本以外の三本であつて、永祿十一年本には「山城州人也諫議大夫善清行八子也」云々（以下永祿二年本類に同じ）の長い註がある。されば、弘治二年本類の原本の註は永祿十一年本の如きものであつたので、他の三本は之を省略したのであらう。さうして、永祿二年本類のは、此の省略したものに、更に増補を加へたものであつて、直接ではないけれども、やはり弘治二年本類の原本の如きものから出たのである。

かくの如く、永祿二年本類の註は、弘治二年本類の諸本、又は其の原本のやうなものから出たものであつて、註から見れば、永祿二年本類原本の基づく所の本は、弘治二年本類原本に似たものであるといふ事が出来る（同書、一九四ページ）。

運歩色葉集の該当箇所は次のようになっている。なお、運歩色葉集の底本としては元龜二年本（京都大学附属図書館蔵）と浄嘉堂文庫蔵本とを使用し、引用は浄嘉堂文庫蔵本を代表させた。

浄蔵貴所

山城州人諫議大夫善清行第八子也延喜時人也四歳而讀千字文  
聞一知レ二、十二歳而出家為慈覚之弟子ニ中齡、草創雲居寺落座  
而行力不レ衰折ニ鴨川水ニ逆流或祈隣屋之桃実、諸子ニ  
塔、傾ニ直ニ之、村上康保元甲子率ニ至天文十七年戊申五百八十五年  
也

これによると、運歩色葉集の注記は、永祿二年本類のものと大略同文

であり、文中に「祈三八坂塔不傾」の重複は認められず、永禄十一年本の注記と一致する。このことから、運歩色葉集の注記は、弘治二年本の原本と関係をもつのではないかと推定される。なお、後段にみられる「村上康保元……」の年記は永禄二年本類に属する堯空本と一致する。

次に橋本博士は「犬追者」についても言及する。

犬追者 有玉藻前故事云未知本説也(天正十七のみ)』とある、天正十八

犬追者 有玉藻前故事云々(黒本)

犬追者 玉藻前有故事(伊京集)

犬追者 玉藻前之故事云々(弘治二)

犬追者 玉藻前之故事云々(永禄十一)

犬追物 近衛院御宇始(易林)

犬追者 昔西域有班足王其夫人惡虐過人勸王取千人首其後出生支那国一作周幽王后其名曰褒姒滅国恐人死後出生

于日本近衛院御宇一号玉藻前傷人無極後化成白狐害人惟多時俗欲驅之先逃走犬以試其射騎白狐知之化而成石飛禽獸

當其殺氣者莫不立斃故謂之殺生石云云在下野国那須野原『有此石殺生石是也』(犬追者始于茲矣)但聽之古老口号

雖不知本説且載之而已又注云你元來石頭喚謂殺生石靈從何來受業報如是乎去々自今以後你仏性一具如全体三度摩頂云云取々

々謂頭石振動三烈破成永二孟春十一日玄翁坂山之門第二十五人之内心昭侍者云々(經亮、堯空、村井、両足院、永禄二、永禄五、枳園)

これについて橋本博士は次のように述べている。

「犬追者」の註に弘治二年本類に、有玉藻前之故吏(永禄十一年本に

は此の下に「云々」の二字がある)とあるのは、永禄二年本類の註の

如きものから出たので、印度本原本の註は、恐らく永禄二年本類の如

く、委しいものであつたのであらう(但、「又注云」以下は永禄二年

本類での増加かも知れない)。天正二十年本に、在玉藻前故吏云未知

本説とあるのも、亦印度本原本の如きものから出たものと思はれる。此等の例によつて觀ても、天正二十年本を直に印度本原本の基づく所のものとする事は出来ないけれども、兩者根源を同じうするものである事は明である(同書、二二六ページ)。

元龜二年本運歩色葉集は永禄二年本類の注記と一致し、静嘉堂文庫蔵本は前段部については永禄二年本類と一致しているが、「又注云」以下を省いている。したがって、運歩色葉集は、印度本原本ならびに永禄二年本類とならぬかの書誌的關係があるのではないかと推定されるのである。

#### (四) 運歩色葉集と永禄二年本類節用集

運歩色葉集がどの程度永禄二年本類と関係をもつものであるのか調査してみることとする。

そこで、弘治二年本類に存在しない注記で、運歩色葉集と永禄二年本類ならびに枳園本類とに共通する例を次に掲げる。文本は運歩色葉集による。

##### ① 「印度」の注記

『林凡語』日ニ一此日三月天竺地形如半印月故也又日月支国也(運歩)

##### ② 「伯樂」の注記

『』部分は枳園本ならびに文明本に存するが、他本には存在しない。

##### ③ 「伯樂」の注記

『典天馬星名』(運歩)

『』部分は永禄二、永禄五、慶長九、村井、堯空、両足院、文明の

各本に存し、

戦国時相馬人也由是日本医馬病二者云云又ハ乃星名也

此星典天馬故相人之名也伯樂名孫陽

とあって、ほぼ一致する。他本には存在しない。

③ 「鱸」の注記

腹赤魚「吉野桜落レ水作レ魚故日桜魚」亦日鼓司魚、徳大寺殿日鼓司者  
楽人之名也昔楽名也平家一不参吉野鼓司不参又日栖翁名也」

(運歩)

『』部分は永禄二、経亮、枳園、堯空、両足院、慶長九(見出語  
「腹班」と作る)の各本に存し、他本には存在しない。

④ 「放埒」の注記

『人、不順法度如馬放』(運歩)

『』部分は経亮、永禄二、永禄五、枳園、村井、両足院、堯空、慶  
長九、文明の各本に存し、他本には存在しない。文明本節用集には次の  
ように、

放埒 不当之義人不順法度如馬放埒也

放題 孤魚題意義也感作傍題詩歌所書也日本俗語云放埒人不似也

とあって、別項であったものが合併され、次のように記載された例も認  
められる。

放題 詩歌所書日本俗云放埒人不順法度如馬放埒也

(慶長九)

放題 日本俗或云放埒人無順法度如生馬也

(寛弘)

また、弘治二年本類等の各本では、

不当意 (弘治二、永禄十一、大谷、明応五、天正十八)

(伊京)

となっていて、文明本の注記を各諸本が前段と後段とのそれぞれを分解  
し引き継いでいったものようである。

⑤ 「布袋和尚」の注記

『支那散聖也即弥勒化身也背後有目也偈日弥勒分身百億時々示時人々  
自不知名常持一布袋』

(運歩)

『』部分は枳園、堯空の各本に存し、他本には存在しない。

⑥ 「豊草原国」の注記

日本総名又日『葦原三穂国或日二神以レ予探二海底一有物碍予神、日碍

予物、何哉今地主權現日吉答日葦也故日葦原国也」

(運歩)

『』部分は経亮、永禄二、永禄五、慶長九、堯空、枳園、村井、両  
足院、文明の各本に存し、他本には存在しない。

⑦ 「屠蘇白散」の注記

『酒、名元三飲之自少至老』

(運歩)

『屠蘇白散』ならびに『』部分の注記は、永禄二、永禄五、堯空、経  
亮、枳園、村井、慶長九、両足院の各本に存し、他本には存在しない。

⑧ 「遍入障子」の注記

『紫宸殿、後七廻、中間障子、名』

(運歩)

『遍入障子』ならびに『』部分の注記は、枳園、易林の各本に存し、  
他本には存在しない。

⑨ 「諒闇」の注記

指天子御中陰尚書日——陰三年不レ言』

(運歩)

『』部分は経亮、永禄二、永禄五、村井、枳園、堯空、両足院、文  
明の各本に存し、他本には存在しない。

⑩ 「破取盧島」の注記

『日本総名男女、神垂跡時潮洙自三凝成島故又日自凝島也』(運歩)

『』部分は文明、経亮、永禄二、慶長九、伊京、両足院、村井、堯  
空、枳園の各本に存し、他本には存在しない。

⑪ 「脇楯」の注記

『神功皇后異国退治之時八幡在胎内王体甚大而鎧不レ及三其脇一即以楯  
隱脇自是日本武士例以為一』

(運歩)

『脇楯』ならびに『』部分の注記は、経亮、永禄二、永禄五、堯空、  
村井、両足院、伊京の各本に存し、他本には存在しない。

⑫ 「帷子」の注記

『在伝九——堂而哭同十七レ——伝其書』

(運歩)

『帷子』ならびに『』部分の注記は、枳園、天正十八の各本に存し、

他本には存在しない。

⑬ 「老子」の注記

周時八十歳而生『有鬚』故曰「」

(運歩)

『』部分は文明、経亮、永禄二、永禄五、枳園、村井、堯空、両足院の各本に存し、他本には存在しない。

⑭ 「鸞」の注記

五色似鳳而多青也『向鏡則』見其影鳴舞故名鏡日——也』(運歩)

『』部分は文明、経亮、永禄二、永禄五、枳園、村井、堯空、両足院の各本に存し、他本には存在しない。

⑮ 「濫觴」の注記

始之義也『山谷殿岷江始——入楚乃無底』

(運歩)

『』部分は経亮、永禄二、永禄五、枳園、村井、堯空、両足院の各本に存し、他本には存在しない。

⑯ 「優曇華」の注記

又日優鉢羅花又日靈瑞花此花芽出而一千年者而一千年開而一千年合三千年一度開花也『此花現則金輪王出矣殊勝之花也我仏以喻妙法希有一也』  
也台家謂妙法者一念三千陲門三千諸法一念開発<sup>スル</sup>為<sup>ト</sup>花故喻<sup>ト</sup>妙法也  
此花有七徳一々人々民受悦<sup>ニ</sup>天下安穩<sup>ニ</sup>三国土豊饒<sup>ニ</sup>四諸人無病<sup>ニ</sup>五命終無苦<sup>ニ</sup>六諸水清淨<sup>ニ</sup>七諸花薰著也』  
(運歩)

『』部分は経亮、枳園、堯空、両足院、村井、永禄二の各本に存し、他本には存在しない。

⑰ 「瓜」の注記

『慈覺大師被行』如法經三七日即無食也結願日自<sup>ニ</sup>三童子<sup>一</sup>持進大師<sup>ニ</sup>不食之童子云号<sup>レ</sup>——非食中只可<sup>レ</sup>食慈覺<sup>ニ</sup>童子<sup>一</sup>言<sup>ニ</sup>云々江州甘露庄生瓜自天降也故至今<sup>一</sup>不入<sup>ニ</sup>三食之内<sup>一</sup>』  
(運歩)

『』部分は経亮、枳園、永禄二、村井、堯空、両足院の各本に存

し、他本には存在しない。

⑱ 「孔雀」の注記

『其尾初春生<sup>ニ</sup>四月後凋<sup>ニ</sup>与<sup>ニ</sup>花俱<sup>ニ</sup>榮<sup>ニ</sup>与<sup>ニ</sup>花俱<sup>ニ</sup>衰<sup>ニ</sup>』因雷而孕也  
(運歩)

『』部分は経亮、永禄二、永禄五、堯空、村井、両足院、枳園、永禄十一、文明の各本に存し、他本には存在しない。

⑲ 「椰子盃」の注記

『以毒<sup>ヲ</sup>投<sup>テ</sup>盃中<sup>ニ</sup>則酒急沸出也今<sup>一</sup>人塗<sup>スル</sup>盃中<sup>ニ</sup>甚<sup>ニ</sup>椰子之用<sup>ヲ</sup>』

『』部分は永禄二、永禄五、枳園、伊京、文明の各本に存し、他本には存在しない。永禄十一、弘治二、天正十七の各本には「消毒(也)」とある。

⑳ 「楊枝」の注記

『梵網經云齒木也』

(運歩)

『』部分は経亮、永禄二、永禄五、枳園、堯空、伊京、文明の各本に存し、他本には存在しない。

㉑ 「傾城」の注記

『古語云一顧——并顧傾国』

(運歩)

『』部分は経亮、永禄五、枳園の各本に存し、他本には存在しない。

㉒ 「扶桑国」の注記

日本総名也『朝日必昇<sup>ニ</sup>若木之梢<sup>ニ</sup>』

(運歩)

『』部分は文明、経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園に存し、他本には存在しない。

㉓ 「富士山」の注記

万葉集云不尽山此山至高瞻望不尽故也又四時雪不尽故也今日——  
此山神女也欲富男子故世俗祝<sup>シテ</sup>以<sup>テ</sup>各——也人皇第七代孝靈帝善記  
三年甲辰三月十五日一夜從地涌出<sup>ス</sup>其高一由旬也』至<sup>ニ</sup>天文十七年

戊申<sup>二</sup>二千二十五年也

(運歩)

『』部分は文明、経亮、永禄二、永禄五、枳園、堯空、明応五の各本に存し、他本には存在しない。

②4 「臨深履薄」の注記

『戦と競と如下ニ一洲一薄氷毛詩

(運歩)

「臨深履薄」ならびに『』部分は、伊京、経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園、文明の各本に存し、他本には存在しない。

②5 「琴」の注記

『伏羲始造龍池八寸通三方鳳池四寸合四時長三尺六寸象三二年三百六十日一広六寸象六合天地四方前廣象尊後狹象卑上門法天下方法地五絃象五行大絃者小絃者臣第一為宮次商角徵羽次少官小商昔樂器也上弓六張双之陳也絃と君一二三四五六七八九十計為巾已上十三絃也文王加二絃日文絃武王加一絃日武絃也

『』部分は文明、経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園、永禄十一の各本に存し、他本には存在しない。なお、文明本を除く節用集の注記は『』のみであって、文明本の注記の一部を引用している。

②6 「役行者」の注記

賀茂役公民也文武帝時人也季此余棄家入葛城山居小角『持孔雀明王呪乗五色雲優遊仙府』驅遂鬼神為使令今日山伏者……末流也

(運歩)

『』部分は文明、経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園の各本に存し、他本には存在しない。

②4 「馬酔木」の注記

馬食之則死『歌云取ツナグ玉田横野ノハナレ駒ツ、シカ枝……花サク』

(運歩)

『』部分は経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園、文明、永禄十一に存し、他本には存在しない。

②5 「棟」の注記

号『雲見草』

(運歩)

『』部分は文明、経亮、永禄二、永禄五、枳園の各本に存し、他本には存在しない。

②6 「三界内諸天」の注記

『三界者欲界色界無色界也欲界内有六欲天四王忉利夜摩兜率化樂他化自在之六欲天也色界内有四禪天初禪二禪三禪是也無色界内有四天色無辺所空無辺所無所有所天非々想天是也』

(運歩)

「三界内諸天」ならびに『』部分の注記は、文明、易林、経亮、永禄二、永禄五、堯空の各本に存し、他本には存在しない。

②7 「耆婆」の注記

天竺阿闍世王時名医也『平生竊持藥王樹枝照見人之五臟二医之耆婆注経歟』

(運歩)

『』部分は永禄二年類の諸本に次のようにあって、天竺醫師竊尊同時天竺阿闍世王時名医也即奈女之子也平生竊持藥王樹枝照見人之五臟二病根医之詳見手経

(経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園)

運歩色葉集とほぼ一致する。また文明本も次のようにあって運歩色葉集と一致している。

天竺阿闍世主時之名医師也与竊尊同時時即奈女之子也平生竊持藥王樹枝照見人之五臟病根医之見耆婆経医師之始也

弘治二年本類その他では次のようになっていて、天竺醫師竊尊同時

(弘治二、図書寮、黒本、易林)

天竺阿闍世王時名醫也姓秦名越人也

②8 「耆婆鳥」の注記

永禄十一年本の注記が最も運歩色葉集に近い。

(運歩)

『』部分は文明、伊京、経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園、永禄十一の各本に存し、他本には存在しない。

②⑧ 「魚道」の注記

『』者建残一盃以余瀝一洗盃痕喻之魚過旧道故曰——魚雖游大海終不忘旧道者也』 (運歩)

「魚道」ならびに『』部分の注記は、伊京、経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園、文明、天正十八の各本に存し、他本には存在しない。ただし、天正十八年本では次のように注記が省略化されている。

——建残盃也以余瀝洗盃痕喻之魚道旧道故云尔

③① 「師趨」の注記

十二月『者一季之終也諸人事繁不暫居家志使弟子雖師匠亦趨走故曰——』 (運歩)

『』部分について永禄二年本類ならびに文明本は次のようになっている。

十二月『一年之終諸人事繁而不暫居家雖師匠亦趨故云——也』

(経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園)

『一年之終也諸人事繁而不暫居家雖師匠亦趨走故云——也』

(文明)

運歩色葉集とはば一致する。

③② 「石南花」の注記

『唐人詩不知青嶂夜来雨清曉——乱流石又釈』下学 (運歩)

『』部分は経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園、文明の各本に存し、他本には存在しない。

③③ 「聖徳太子」の注記

『用明天皇第一之子也』本地観音也前支那人則南岳惠恩禪師也『目達磨指南』成干日本有六異名生既故日既戸太子用明愛敬居南宮之殿上故日上宮太子二人同時奏事一時善聴故日八耳太子又

日豊聡太子又日耳聡太子一曆明仁恕故曰——討守屋始立四天王寺興隆佛法

『』部分は経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園、永禄十一の各本に存し、他本には存在しない。

③④ 「獅子身中虫」の注記

『喻人自損其身也言獅子雖已死百獸尚畏其威不能食其内故自身中生虫自食其内也見仁王經』 (運歩)

「獅子身中虫」ならびに『』部分の注記は、経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園、伊京の各本に存し、他本には存在しない。

③⑤ 「穀」の注記

『一殊八合春之云云』

(運歩)

『』部分は次のように「精」の掲出語に付し、永禄二年本類ならびに文明本に存し、

米一升春為八合等義也 (文明)

白米又穀米一升春為合等也 (経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園)

運歩色葉集の注記とはば一致する。他本には存在しない。

③⑥ 「指南」の注記

『周時南越使欲歸其国旧路周公且造車与之車上置木人以使得歸也越即南国也』

『』部分は経亮、永禄二、永禄五、堯空、枳園、文明の各本に存し、他本には存在しない。

③⑦ 「折角」の注記

『前漢元帝召諸易論之五鹿咄弁朱雲其——』

(運歩)

『』部分は伊京集の注記と一致し、永禄二年本類ならびに文明本には次のようになっている。



以上の結果から、運歩色葉集と永祿二年本類とは緊密な関係にあるものと思われる。少数ではあるが、弘治二年本類中の、とくに永祿十一年本との関係も指摘し得る。したがって、永祿二年本類乃至印度本原本に運歩色葉集が基づいたもの、または逆に永祿二年本類乃至印度本原本が運歩色葉集に基づいたものと推測されるのである。永祿二年本類ならびに印度本原本と運歩色葉集との関係については右の用例が示す如く、伊京集、文明本などの伊勢本に属する節用集の注記と多く一致し、節用集の古い様態を運歩色葉集の注記にうかがわれることなどから、印度本原本との関係が想定される。運歩色葉集の注記には次のような伊京集とのみ緊密な関係を有する例も見られる。

雜五行書云十月亥日食餅令人無病又見干太平御覽餅部又說家 能生多子家子  
猪亥通用也故女人家之家日獻餅祝也（弘治二、永祿十一）  
雜五行書云十月亥日食<sup>レ</sup>餅令人無病云又說家 能<sup>二</sup>生多子<sup>一</sup>女人家日獻餅祝  
也（天正十七）

雜五行書云十月豕日食餅シホ令人無病シホ又見于太平御覽餅部シホ  
(経亮、慶長丸、永禄二、村井、堯空、阿足院)

雜五行書云十月豕日食餅令三人無<sub>レ</sub>病（永祿五、黒本）

雜五行書云十月家日食<sup>クラヘハ</sup>餅<sup>ヲ</sup>令<sup>テ</sup>人無病又見<sup>テ</sup>于<sup>ト</sup>太平御覽餅部又說云家能多<sup>ハク</sup>生<sup>ニ</sup>子故<sup>ニ</sup>女人羨<sup>ム</sup>之<sup>ヲ</sup>家日獻<sup>シテ</sup>餅祝<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>家与<sup>ト</sup>猪亥通<sup>シテ</sup>用<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>

雑五行書<sup>ニ</sup> 日十月<sup>ノ</sup>豕<sup>ヘ</sup> 日食<sup>ヲ</sup>餅<sup>ヲ</sup> 令<sup>テ</sup>三人無病<sup>ニ</sup> 日<sup>ヲ</sup>亥猪<sup>ヲ</sup>一<sup>ト</sup>  
 (枳園のみ)』とある、天正十八、(易林)

雜五行書云十月亥日食餅令<sup>レ</sup>人無病云々又一說云豕能生多子故女人羨之至十月豕日獻餅祝之也愚謂十月亦豕日也故用<sup>ニ</sup>此月此日<sup>一</sup>也『豕每年

產三十二子<sup>ヲ</sup>象三十二年十二月也有閏月一則產三十三子<sup>ヲ</sup>也』豕与三猪亥三通同也又見三太平御覽餅部二也矣

(文明)

雜五行書ニ十月豕日食餅令<sup>シテ</sup>人無病又說豕能生多子故女人羨<sup>ラ</sup>之  
 之豕日獻<sup>シテ</sup>餅祝<sup>シテ</sup>之豕与猪亥通<sup>シテ</sup>用<sup>シテ</sup>之  
 (文明)

雜五行書<sup>ニ</sup>曰十月<sup>ニ</sup>豕<sup>ノ</sup>日食<sup>シテ</sup>餅<sup>ハ</sup>令<sup>レ</sup>人無<sup>ク</sup>病<sup>ニ</sup>一說云豕能多<sup>ク</sup>生<sup>ニ</sup>子<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>女人<sup>ヲ</sup>養<sup>テ</sup>之<sup>ニ</sup>  
至<sup>ニ</sup>三十月<sup>ノ</sup>豕<sup>ノ</sup>日<sup>ニ</sup>餅<sup>ハ</sup>飲<sup>ニ</sup> 仏神<sup>ニ</sup>祝<sup>ハ</sup>之<sup>ニ</sup>也愚謂<sup>ク</sup>十二月<sup>ノ</sup>亥<sup>ノ</sup>日也故用<sup>ニ</sup>三豕<sup>ノ</sup>曰<sup>ク</sup>『豕  
每年<sup>ニ</sup>產<sup>ニ</sup>十二子<sup>ノ</sup>一象<sup>ニ</sup>十二月<sup>ノ</sup>閏年<sup>ニ</sup>產<sup>ニ</sup>十三子<sup>ノ</sup>』豕猪<sup>ニ</sup>通<sup>ニ</sup>  
雜五行書<sup>ニ</sup>云十月<sup>ノ</sup>亥日食<sup>シテ</sup>餅<sup>ハ</sup>令<sup>レ</sup>人無<sup>ク</sup>病<sup>ニ</sup>又一說云豕能<sup>ク</sup>生<sup>ニ</sup>多<sup>ク</sup>子<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>女人<sup>ヲ</sup>養<sup>テ</sup>之<sup>ニ</sup>  
之至十月<sup>ノ</sup>亥日<sup>ニ</sup>飲<sup>シテ</sup>餅<sup>ハ</sup>祝<sup>ハ</sup>之<sup>ニ</sup>十月亦亥日故用<sup>ニ</sup>此月<sup>ノ</sup>此日<sup>ニ</sup>『豕<sup>ハ</sup>每年<sup>ニ</sup>產<sup>ニ</sup>十二子<sup>ノ</sup>』  
子<sup>ニ</sup>閏<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>十三子<sup>ノ</sup>一也』  
(運歩)

言孫兒在胎内一時頭戴二胞衣一防毒故噓之  
(弘治二、天正十八)

『下学下二十』  
言孫兒在胎内ニ頭戴<sup>ル</sup>胞衣<sup>エナ</sup>防<sup>ク</sup>毒<sup>フ</sup>故<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>今<sup>ニ</sup>武士臨<sup>ニ</sup>戰場<sup>ニ</sup>時戴<sup>レ</sup>——以向<sup>ニ</sup>敵<sup>ニ</sup>

ある、村井、堯空、慶長九、両足院）（経亮、永禄二、永禄五、枳園のみ『』と

又作「母衣言」<sup>ハ</sup>「孩子」在「母胎」時頭戴「胞衣」以防諸毒也。今武士臨戰場ニ時戴「繩」以向敵蓋嚙「胞衣」防毒也。母胎與戰場生死之時也。異名「金吐差」<sup>ニ</sup>。  
(文明)

『焚<sup>ヤク</sup>噲<sup>ハ</sup>流<sup>リ</sup>』作<sup>ス</sup>母衣<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>孩兒<sup>ノ</sup>在<sup>リ</sup>胎<sup>ニ</sup>內<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>頭<sup>ヲ</sup>戴<sup>テ</sup>胞衣<sup>ヲ</sup>防<sup>グ</sup>毒<sup>ヲ</sup>今<sup>ニ</sup>  
武<sup>ノ</sup>士<sup>ノ</sup>臨<sup>ニ</sup>戰<sup>ニ</sup>場<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>戴<sup>テ</sup>母衣<sup>ヲ</sup>『日<sup>ノ</sup>懸<sup>ル</sup>也』向<sup>テ</sup>敵<sup>ヲ</sup>胞衣<sup>ヲ</sup>防<sup>グ</sup>毒<sup>ヲ</sup>喻<sup>フ</sup>  
母<sup>ヲ</sup>與<sup>テ</sup>胎<sup>ニ</sup>內<sup>ニ</sup>戰<sup>ニ</sup>場<sup>ニ</sup>生<sup>ル</sup>死<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>二<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>（運<sup>ニ</sup>歩<sup>ニ</sup>、伊<sup>ノ</sup>京<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>み<sup>ニ</sup>）』とある）

周末戦国之時ノ名医也（弘治二、天正十七、天正十八、黒本、永禄二、永禄

五、堯空、村井、慶長九、兩足院、永祿十二

戰國時之醫師  
周末名醫師也

又鵠鵠集字函周末戰國之時、名醫師也、史記云扁鵲一名姓秦、越人秦君、以茲方伝レ之乎、  
(文明)

周末戰國時名醫姓秦名越人也  
史記云『姓秦名越人』乘君以三禁方二伝レ之周末之名醫也

(伊京) (運步)

(五) 弘治二年本類節用集と運歩色葉集

弘治二年本類と運歩色葉集との注記の一致については、弘治二年本、永祿十一年本、天正十七年本とが独自に有する注記に限って一致するという点に特徴がみられる。それを表によって示す（○印は掲出語の存在を示す）。

⑥ 絡レ 兎	⑤ 菅烝相	④ 寒山拾得	③ 柑子	② 南風北風飛 雲不飛雪	① 土公
掲出語					
運歩色葉集					
弘治二年本					
永祿十一年本					
天正十七年本					
春三月在釜が共存					
(関東書之)					
逆算年代アリ					
逆算年代アリ					
逆算年代アリ					
逆算年代アリ					
同文					
延喜元年正月二十九日左迂が共存					
大唐国清行堂が共存					
注ナシ					
(大谷本)					
易林本					
明應五年本					
黒本本					
文明本					
天正十八年本					
伊京集					
永禄二年本類					
大唐国清行堂ナシ					
注ナシ					
(大明本)					
永禄二年本類					
枳園本					
黒本本					
鰻頭本					
大谷本					
逆算年代ナシ					
注ナシ					
(大明本)					
慶長九年本					
枳園本					
易林本					
注ナシ					
永禄二年本類					
枳園本					
易林本					
その他の					

⑦	要明天皇	⑧	湮懸	⑨	四手繩	⑩	余菅	⑪	余慶 (余殃)	⑫	多武峰	⑬	當麻寺	⑭	唐土	⑮	大鉄岡山	⑯	玉刻春 (命終事)	⑰	大祥忌 (第三年也)	⑱	大禍日	⑲	大明日	⑳	大將軍
同文	喉輪が共存			同文		同文		積悪之家必有余殃が共存	掲出語(余慶) 余殃と別々に	同文	同文	同文	同文	同文	同文	同文(高廣二十四万里)	同文(東西八万一千里南北六万七千里)	同文(命終也)	同文(命終事)	同文(第三年也)	同文	同文	同文	同文	同文	同文	
									掲出語(余慶) 余殃と別々に																		

注  
異文  
○(永祿二年本類)  
○(文明本)  
○(積園本)  
○(天正十八年本)

注  
○(永祿二年本類)  
○(伊京集)  
○(黒本本)  
○(易林本)  
○(天正十八年本)  
○(明徳五年本)  
○(饒頭本)  
○(大谷本)

注  
○(永祿二年本類)  
○(和州有之)  
○(天正十八年本)  
○(和州有之)  
○(天正十八年本)  
○(或云支那震旦)  
○(文明本)

左伝云不積善家必有余殃(運歩と同じ)  
余慶  
積善之家必  
○(その他)  
和州有之  
○(天正十八年本)  
和州有之  
○(天正十八年本)  
或云支那震旦  
○(文明本)

運歩色葉集と印度本節用集所収語彙の注記をめぐって

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
手 向	田 藏 田	大 般 若	手 網	玉 簪	醍 醐 院	大 織 冠	陶 朱 公	達 磨 大 師	泰 澄 大 師	道 風	淡 海 公	大 政 大 臣
	(注文詳細)				逆算年代アリ				(掲出語、泰証大師)			
	同	同	七尺五寸也一具云又一筋云が共存	同	逆算年代ナシ	同	范蠡が共存	同	同	逆算年代アリ	(年記)養老四アリ	同
	文	文		文		文		文	文	逆算年代ナシ		文
									(掲出語、泰澄大師)			
注ナシ (易林本)	神祇 (明応五年本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (大谷本)	手經 (手繩)或作二	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (伊京集)

48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34
内 大 臣	長 柄 橋	南 圓 堂	南 禪 寺	唾 ハキ 吐	購 ツクリトワ 問	露 弘	縦 ツナク	弦	代 指	蘇 民 将 来	袖 ソアシルシ 璽	染 殿 后	冷 泉 院	黎 民
			弘治二年本を除き、瑞竜山大平興が共存		同							清和天皇母文徳天皇之后が共存		
	同	同	同	同	文	同	同	同	同	同	同	同	同	同
	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文
					注ナシ									
注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)	注ナシ (易林本)

52	『忠言逆 耳』 (運歩色葉 集のよまに 作る)	同 文	同文 (去來言問 伊勢物語)
51	柚	同文 (聖武時自唐渡)	同文
50	普賢象	同文	同文
49	名負	同文	同文

注ナシ (易林本)	注ナシ (永祿二年本類 積園本 圖書寮本 天正十八年本 文明本 易林本 伊京集 明應五年本 黒本本 大谷本)	同文	同文
注ナシ (黒本本 圖書寮本)			

右に示す如く、運歩色葉集の注記と親密な関係をもつ弘治二年本類のものと考えてよいように思う。ただ、一例、「甘子」の注記に、

人王四十五代聖武御宇神龜二年自唐渡之  
(文明)

聖武神龜二乙丑自唐渡之至弘治二丙辰八百四十二年  
(弘治二)

聖武神龜二年乙丑自唐渡之至永祿六年癸亥八百五十年也

（天正十七）

聖武神龜二乙丑自唐渡之至永祿十一戊辰八百五十四年（永祿十一）

聖武天皇神龜二乙丑自<sub>レ</sub>唐渡至天文十七戊申八百三十四年也

(運歩)

とある。文明本節用集の注記の存在によって、本例のみ弘治二年本、永禄十一年本ならびに天正十七年本独自のものと言えないが、弘治二年本本の類の諸書のなかで、運歩色葉集と関係をもつ本は、弘治二年本、永禄十一年本、天正十七年本ようなものではないかと推測されるのである。

(六) まとめ

本稿の調査によつても運歩色葉集と節用集との書誌的先後關係は不明確であるが、運歩色葉集が節用集に基づいたものと仮定するならば、いぜん運歩色葉集の編纂時に參加した節用集としては、弘治二年本、永祿十一年本乃至天正十七年本のようなものから一本と、印度原本本、永祿二年本類のなから比較的永祿二年本の性格の濃いもの一本というように複數に恒つたであらうと推定される。

その際に基本になったものは永禄二年本類のものであって、弘治二年本類のものはこれに存在しない語ならびに注記を補うために（量的には大いに）利用されたのではないかと思われる。

なお、書誌的關係を考察する方法としては、節用集諸本もその一部を取り扱つたに過ぎなく、客観性に乏しい。先学諸賢の御教示をお願い申し上げます。

注1 文明本は『文明本節用集研究並びに索引』（影印篇）による。

弘治二年本、永祿二年本、堯空本、両足院本は『印度本節用集』古本  
四種研究並にによる。  
『に総合索引』(影印篇)による。

伊京集、明応五年本、饅頭屋本、黒本本、易林本は『改訂新版古本館用集大研究並びに総合索引』（影印篇）による。

圖書寮零本 村井本、慶長九年本は『印度本節用集』和漢通用集 他三種研究並びに総索引（影印篇）による。

永祿五年本は『京都大学文学部国語学国文学研究室編新写永祿五年本節用集』による。

永禄十一年本は学習院大学国文学科研究所蔵のものを複写撮影したものである。

天正十七年本は『天理善本叢書増刊下学集  
函書館節用集天正十七年本』による。

枳園本は『天理善本叢書節用集二種』函館善本叢書による。

経亮本は『京都大学文学部国語学国文学研究室編経亮本節用集』による。

大谷大学本は『大谷大学本節用集研究並びに総合索引』による。

『天理學集善本叢書節用集天正十七年本』  
（解題 安田章氏）を參考

『古本節用集の研究』より引用。  
元龜二年本は『京都大学文学部 編 元龜二年 重歩色葉集』による。

嘉堂文庫藏本は、『古世古辞書四種研究並びに総合索引』（影印篇）による。